平安期の「袪」の訓タモト

――『今昔物語集』の捨て仮名付きの「袪ト」をめぐって――

栗原さよ子
安部清哉

［キーワード　①訓釈　②「袂」「袪ト」「袖」　③捨て仮名　④字鏡抄・字鏡集　⑤ソデ・タモト］

1. はじめに　～要旨～

『今昔物語集』（以下、『今昔』）には、「袪（きよ）」の字が三箇所にみられる。

［一］巻二三・一五話　欵冬ノ衣ノ袪ト吉ク被曝タルヲ着テ（新大系・旧大系・旧全集）[注1]

［二］巻二六・一七話　袪ヨリ手ヲ出シテ（新大系・旧大系・旧全集・新全集）

［三］巻二八・七話　袪ヨリ肱ヲ取出シテ（新大系）

これらの訓はソデとタモトでゆれがある。従来の注釈では、「袪」の訓を類聚名義抄、色葉字類抄を根拠にソデとよませる立場がある一方、『今昔』の捨て仮名の「ト」や後代の傍訓からタモトとよむ立場もある。しかしタモトとよむことについては、類聚名義抄、色葉字類抄に訓が見られず、確証が得られないのが現状である。ところで、鎌倉初期の字鏡抄・字鏡集（以下、字鏡と統一的に呼ぶ）諸本では、「袪」の字はソデともタモトともよまれうるという事実がある。本稿ではこの点に注目しつつ、「袪」がタモトと訓じられるまでの、漢字「袪」とタモト訓との関連について、古辞書を中心に考察してみたい。

『今昔』の漢字部分の訓みは、類聚名義抄・色葉字類抄の訓からある程度うかがえるのだが、[注2] 字鏡は、『今昔』成立より遅く、『今昔』の訓との資料的な関連性を示すのは難しい。しかし、鎌倉初期に「袪」の訓としてタモトも定着していたことを考慮すると、『今昔』執筆当時はタモトが定着はしていなかったにせよ、よまれうる訓として筆者及び一般に意識され始めていた可能性がある。したがって巻23の捨て仮名つきの例「袪ト」は、『今昔』の筆者があえてソデと区別し、タモトとよませたいがために行ったものと推測することが可能となることを

論じる。

以下、『今昔』での「袪」の用法と読みを、諸注釈によって検討し、ついで、古辞書によって、「袪」と関連する「袖」「袂」の訓とを比較検討していくことにする。

2. 『今昔』の「袪」が現われる箇所及び校異

まず、新旧大系、新旧全集及び集成のうち、いずれかで「袪」がみられる箇所を注と共に掲げる。

[一] 巻二三・一五話（捨て仮名つきの例）

(1) 欵冬ノ衣ノ袪ト吉ク被曝タルヲ着テ（新大系三五二頁、旧大系二五一頁、ルビは新大系による。）

新大系注：「ト」は「袪」の捨仮名。宇治拾遺「衫」。底本傍注も同じ。汗取りのひとえか。

旧大系注：普通ソデとよむ字だが、茲では通じない。B本「衫」、丹本「糸」に作る。宇治「山吹の絹の衫よく」。

(2) 欵冬ノ衣ノ袪ト吉ク被曝タルヲ着テ（旧全集三二五頁）

旧全集注：色・類の「ソデ」はここでは当たらない。「ト」を捨て仮名とみ、色・類に「ソデ・タモト」とよむ「袂」に通わせれば、「たもと」のよみが得られよう。宇治拾遺「衫」も色「ソデ」のよみがある。丹鶴本・攷証本は「糸」につくるが、原姿ではあるまい。

(3) 欵冬ノ衣ノ袪ト吉ク被瀑タルヲ着テ（新全集二〇四頁）

新全集注：底本「袪」。「ト」を捨て仮名とみ、「袂」に通わせて「たもと」と読んでおく。『宇治拾遺』「衫」。

(4) 欵冬の衣の糸吉く曝されたるを着て（集成六三頁）（注なし。）

『宇治拾遺物語』の同話の箇所を掲げる。

(5) 山吹の絹の衫よくさらされたる着たるが（旧大系三二二頁、底本は「衫」が漢字表記。）

(6) 山吹のきぬの衫、よくさらされたる着たるが（新大系二八二頁、底本は「衫」が漢字表記。）

[二] 巻二六・一七話

(7) 亦若キ男共、十餘人許出来テ、袪ヨリ手ヲ出シテ、薄キ刀ノ長ヤカナルヲ以テ、此ノ暑預ヲ削ツ、、撫切ニ切ル。（旧大系四六二頁）

旧大系注：諸本かく作る。よみは、名義抄、字類抄による。↓巻二三 一五 五四。但し、宇治は「たもとより」。

(8) 亦、若キ男共十余人許出来テ、袪ヨリ手ヲ出シテ、薄キ刀ノ長ヤカナルヲ以テ、此ノ暑預ヲ削ツ、撫切ニ切ル。（新大系七四頁）

新大系注：諸本かく作り、底本、東北本、黒川本「タモト」と傍訓。（後略）

(9) 亦若キ男共十余人許出来テ、袪ヨリ手ヲ出シテ、薄キ刀ノ長ヤカナルヲ以テ、此ノ暑預ヲ削ツ、、撫切ニ切ル。（旧全集六一三頁）

(10) 亦若キ男共十余人許出来テ、袪ヨリ手ヲ出シテ、薄キ刀ノ長ヤカナルヲ以テ、此ノ暑預ヲ削ツ、、撫切ニ切ル。（新全集五五六頁）

旧全集注：色「袖シウ　ソテ衫袂袪…已上衣袖也」。二二五頁注三九【引用者注：巻二三・一五話】より「たもと」ともよめよう。宇治拾遺「たもと」。
新全集注：色「袖シウ　ソテ衫袂袪…已上衣袖也」。二〇四頁注二【引用者注：巻二三・一五話】より「たもと」ともよめよう。『宇治拾遺』「たもと」。

(11) 亦、若き男共十余人許出で来たりて、袪より手を出だして、薄き刀の長やかなるを以て、此の暑預を削りつつ撫切に切る。（集成二〇一頁）

集成注：「袪」は『名義抄』に「ソデ、スソ」とあるが、底本読み仮名に「タモト」とあり、『宇治拾遺』にも「たもとより」とある。
注の記述に基づき『宇治拾遺物語』の表記を確認する。

(12) わかきをのこども、たもとより手いだしたる、うすらかなる刀の、ながやかなるもたるが、十餘人ばかりいできて（旧大系八四頁）（注なし）

(13) 若きおのこども、袂より手出したる、うすらかなる刀の、ながやかなる持たるが、十余人斗いで来て（新大系三八頁）（注なし。底本は「袂」が漢字表記。）

[三] 巻二八・七話

(14) 此ノ白装束ノ男共ノ馬ニ乗タル、或ハヒタ黒ナル田楽ヲ腹ニ結付テ、程ヨリ肱ヲ取出シテ、左右ノ手ニ桴ヲ持タリ。（旧大系七〇頁）

旧大系注：（補注）底本かく作るは、懐の意のホトコロの下略か。国・B・C三本の「袪」はソデ。甲本の「肱」はワキ（十巻本字類抄）。右の如く異文はあるが、たすきがけのような状態（法然上人絵伝に見える如き）、もしくは着物の腋（掖）から腕をつき出し袖を背で縛りつけた状態を指すものであろう。田楽を活潑に叩いた描写と考えられる。→巻二六⑰九六「袪ヨリ手ヲ出シテ」。

(15) 此ノ白装束ノ男共ノ馬ニ乗タル、或ハヒタ黒ナル田楽ヲ腹ニ結付テ、袪ヨリ肱ヲ取出シテ、左右ノ手ニ桴ヲ持タリ。（新大系二〇九頁）（上記巻二六・一七話の注を参照とある。）

新大系注：→七四頁注一四（巻二六・一七話（用例（8））の注）

(16) 此ノ白装束ノ男共ノ馬ニ乗タル、或ハヒタ黒ナル田楽ヲ腹ニ結付テ、肱ヨリ肱ヲ取出シテ、左右ノ手ニ桴ヲ持タリ。（旧全集一九六頁、新全集一八〇頁）

旧全集注：色「肱ヒチ　ソテクチ」。新全集注：色「肱ヒチ　ソテクチ」。

(17) 此の白装束の男共の馬に乗りたる、或いはひた黒なる田楽を腹に結ひ付けて、袪より肱を取り出だして、左右の手に桴を持ちたり。（集成一八一頁）

集成注：「袪より手を出だして」（二九―一七）とあるところに底本「タモト」と読み仮名を付し、『宇治拾遺』の同話（一―一八）にも「たもとより」とある。
以上の訓の異同をまとめると表1の通りである。[注3]

3. 古辞書の調査

注釈によれば、「袪」の字は、類聚名義抄及び色葉字類抄でソデとよまれる。その点を諸本によって確認し、『今昔』成立後になったとされる字鏡諸本の訓を調査する。それにより、訓の記述にどのような変遷・異同がみられるかを明らかにする。

調査対象とした古辞書は、《1》新撰字鏡（天治本）、《2》類聚名義抄諸本、《3》色葉・伊呂波字類抄諸本《4》字鏡諸本の4分類、影印本一八文献（①～⑱）である。

次に、調査した古辞書に各漢字「袪」「袖」「袂」が項目として挙がっているかどうかを表2に示す。項目として挙がっていても問題の訓が記載されているかどうかには関わらない。

以下に表2で3漢字とも記載のない④、⑤、⑦、⑩を除くものについて古辞書の記述を引用する。古辞書での掲載順に関わらず「袪」「袖」「袂」の順に引用する。ソデ・タモト訓は**太字**で示す。濁声点は、濁点として表したが、その他の声点は、省略する。※印以下は、栗原の注記。

《1》新撰字鏡（天治本）

①京都大学文学部国語学国文学研究室（編）（一九六七）『天治本新撰字鏡』京都大学文学部国語学国文学研究室

袪　丘魚反平袂也去与挙也裏也袂口也

袖　辞救反袪也長也

進也服也究出貌（異体字）臾

袂　弥　亡世二反去

敝　袖末也曾弓

※意味記述が主となっているようであり、訓は「袂」の「曾弓」のみ見られる。

《2》類聚名義抄諸本

②築島裕（一九六九）『図書寮本類聚名義抄』勉誠社

袪　川（順）云音居禾（和）云與袖同　玉云子去反袂口、挙、季云志利曽久　カヽグ巽

袖　川（順）云音岫禾（和）云

曽天

攘袂　川（順）云音弊禾（和）―上同応云―褾、衣袖、詔揖衣

表1 「袪」の校異

	[1]	[2]	[3]
旧大系	―ト	そで	（程）―
新大系	たもト	たもと	たもと
旧全集	たもト	そで	（肱）そでぐち
新全集	たもト	たもと	（肱）そでぐち
集成	（糸）いと	たもと	たもと

表2 古辞書の「袪」「袖」「袂」項目の有（○）無（―）

	袪	袖	袂
①天治新撰	○	○	○
②図書寮名義	○	○	○
③観智院名義	○	○	○
④高山寺名義	―	―	―
⑤鎮国名義	―	―	―
⑥二巻色葉	―	○	○
⑦前田色葉	―	―	―
⑧黒川色葉	―	○	○
⑨二巻世俗	―	○	―
⑩七巻世俗	―	―	―
⑪十巻伊呂波	―	○	○
⑫天文字鏡	○	○	○
⑬永正字鏡	○	○	○
⑭世尊寺字鏡	○	○	○
⑮寛元字鏡龍谷	○	○	○
⑯寛元字鏡国会	○	○	○
⑰白河字鏡	○	○	―
⑱応永字鏡	○	○	○

出解□――、東云袖端借音與滅同

※訓が明らかなのは「袖」の「曽天」のみである。「袪」の記述に見られる「同」は、「袖」と訓が同じであるのか、意味が同じであるのか明らかでない。

③吉田金彦（一九七六）『観智院本類聚名義抄』（天理図書館善本叢書三十二～三十四）天理大学出版部

袪　音居　ソデ　カヽク　スソ　カク（カクの下、行間に）アクサカリ

シリソク　ノゾク　衣ノウラ　子去反

袖　音岫　ソデ

袂　音弊　ソデ

タモト

※「袪」の字に記述が多いが、訓のゆれの点からは、ソデとのみよむことがはっきりしている。

《3》色葉・伊呂波字類抄諸本

⑥（財）前田育徳会経閣文庫（編）（二〇〇〇）『色葉字類抄二二巻本』（尊経閣善本影印集成十九）

袖（ソデ）　衣袂　（異体字か）　袪（キョ）　褄　裒　袍　袿（己上同袖也）

袂（タモト）

※「袖」はソテであることが明らかであるが、「袖」の下に挙がっている「袪」は、漢字左下に「キョ」と音読みが付されているのみで、これが「袖」と意味の上で同じであるのか、訓が同じであるのか確証がない。

⑧中田祝夫・峯岸明（編）（一九六四）『色葉字類抄研究並びに索引　本文・索引編』風間書房（黒川本）

袖（シウ）ソテ　衣袂袪（キョ）裒袍袿（シケイ）（己上衣袖也）

袂（タモト）

※「袪」は「袖」の下に挙がっており、⑥の場合と同じく訓が同じであるか意味が同じであるかは明らかでない。「袂」は「袖」の下に挙がっているほか、単独で項目として挙がっている。（ネ偏の漢字は衣偏の異体字とみた。）

⑨東京大学国語研究室（編）（一九八五）『倭名類聚抄京本　世俗字類抄二巻本』（東京大学国語研究室資料叢書一三巻）汲古書院

袖　袪

袂　同

※カナによる訓はない。「同」は、訓が同じことを示すのか、意味が同じことを示すのか明らかでない。「袪」「袂」の項目はない。

⑪伊呂波字類抄十巻本

正宗敦夫（編）（一九七八覆刻（一九三〇））『伊呂波字類抄二』（覆刻　日本古典全集）現代思想社

袖（ソテ）　衫　袪（二文字略）　袍　袂　袂　袿（己上同衣袖也）

袂（タモト）

※「袖」は明らかにソテとよむ。その後に列挙された「袪」「袂」は訓が「袖」と同じであるか、意味が同じであるか明らかでない。「袂」は別の箇所で「タモト」とある。従って、

「袂」はソテと読む可能性があり、かつタモトともよむものと判断される。

《4》字鏡諸本

⑫天文本字鏡鈔

中田祝夫・林義雄（編）（一九八二）『字鏡鈔　天文本　影印編』勉誠社

袪（キヨ）　サカリ　カサル
アク　ハタソテ
カク　ノソク
スソ　コフ
シリソク　ヒロク
サル　カヽク
コロモノウラ　スツ
ソテ　ハラフ
タモト　アク

袖（イウ）　褒同　ソテ
衷同　タモト
裏同　ムツキ
裒同　スヽム

袂（ヘイ）　ソテ
タモト

衣ノウラ　カヽク
ソテ　カキリ
スツ　ハラフ

⑬永正本字鏡抄

古辞書叢刊刊行会（一九七四）『字鏡抄』古辞書叢刊刊行会（尊経閣文庫蔵）

袪（キヨ）魚　サカリ　タモト
アク　カサル
カク　ハタソテ
スク（ソの誤記）　ノソク
シリソク　コフ
サル　ヒロク

袖（イウ）宥　褒同　東同
裒同　ソテ
タモト
ムツキ
スヽム

袂（ヘイ）条ケツ

⑭世尊寺本字鏡

築島裕（主編）（一九八〇）『字鏡（世尊寺本）』（古辞書音義集成第六巻）汲古書院

袪　コ音去魚反　子去反
キヨ音
サカリ　コロモノウラ
カヽク　ソテ　アク
ノソク　シリソク

袂　火イ音　弥弊反
ヘイ音
タモト　亡世反
ソテ　袖末也

袖　岫音シウ音　似祐反詞秀反
シユ音　ユ音
ショウ音　ソテ
ツムキ（ムツキの誤記か）ソ
テカナツ（元はソテカサリか）
タモト
長也進也

⑮寛元本字鏡

龍谷大学仏教文化研究所（編）（一九八八）『字鏡集（上・下）』思文閣出版

魚袪（キヨ）　アク（カク？）
スソ　ハタソテ
シリソク　ノソク
サル　ヒロク
衣ノウラ　カキリ　カヽク

宥袖（イウ）　褒同　裏同　裒同
ムツキ　ソテ
スヽム　タモト

ソテ　ハラウ　タモト
スツ　サカリ　カサル
コフ

⑯寛元本字鏡
中田祝夫・林義雄（一九七七）『字鏡集　寛元本　影印篇（第二冊）』勉誠社
魚袪（キヨ）　カク　去魚反子去反
スソ　スツ　カヽク
シリソク　ハタソテ　カキリ
コフ　ハラフ
サル　ノソク　サカリ
衣ノウラ　アク
ソテ　ヒロク　タモト
袂口ニ挙也　カサル

祭火ィ　袂（ヘイ）　ケツ
弥弊反
亡世反
袖末也

⑰白河本字鏡
中田祝夫・林義雄（一九七七）『字鏡集　白河本　影印篇（第一冊）』勉誠社
袪（キヨ）　コロモノウラ　サル
サカリ　ノソク　ハラフ
アク　ソテ　コフ

祭（ヘイ）袂　ケツ

有袖（シウ）　岫云褎同　裏同
似祐反詞秀反
裒同
シユ
ショウ　ソテ
ソテカナツ（⑭にもあり。元はソテカサリか？）
長也進也

カク　タモト　ヒロク
スソ　カサル　スツ
シリソク　ハタハ（ソの誤記）テ
カヽリ

（「袂」の字記載なし。）

⑱応永本字鏡
（財）前田育徳会経閣文庫（編）（二〇〇一）『字鏡集四　二十巻本・巻十六～巻二十』（尊経閣善本影印集成二十四）
袪（キヨ）　コロモノウラ　サル
サカリ　ノソク　ハラフ
アク　ソテ　コフ
カク　タモト　ヒロク
スソ　カサル　スツ
シリソク　ハタハ（ソの誤記）テ
カヽク

袖（イウ）　褎同ソテ　タモト
裏同　ムツキ
裒同　スヽム

袂（ヘイ）ケツ　ソテ
ク（タの誤記）モト

諸本をまとめると、「袪」の訓に関して以下のことが明らかとなった。

(1)《2》名義抄、《3》字類抄は、「袪」をソテとのみよむ（可能性がある）（表記の意味が不明確なため、「ソテ」とよむ可能性があるというにとどまるものがほとんど。観智院本類聚名義抄のみ、訓が明らか）。

(2)《4》字鏡は、ほとんどが「袪」をソテともタモトともよむ。

付言すると、全体として平安期に比べ、鎌倉初期成立の字鏡で

表3　平安～鎌倉初期古辞書におけるソデ・タモト訓

番号	古辞書名	書写(成立)年代※注	袪	袖	袂
①	天治本新撰字鏡	1124年	(訓なし)	(訓なし)	曾弓
②	図書寮本類聚名義抄	1100年前後	(訓なし)	曾天	(訓なし)
③	観智院本類聚名義抄	1251年	ソテ	ソテ	ソテ、タモト
④	高山寺本類聚名義抄	鎌倉初期			
⑤	鎮国守国神社本類聚名義抄	鎌倉末～室町初期			
⑥	二巻本色葉字類抄	1565年	(訓なし)	ソテ	タモト
⑦	前田本色葉字類抄(三巻本)	鎌倉初期			
⑧	黒川本色葉字類抄(三巻本)	江戸中期	(訓なし)	ソテ	タモト
⑨	二巻本世俗字類抄	江戸末期	(訓なし)	ソテ	(訓なし)
⑩	七巻本世俗字類抄	室町中期			
⑪	十巻本伊呂波字類抄	江戸後期	(訓なし)	ソテ	タモト
⑫	天文本字鏡鈔	1547年以前	ソテ・タモト	ソテ・タモト	ソテ・タモト
⑬	永正本字鏡抄(尊経閣文庫蔵)	1508年か	ソテ・タモト	ソテ・タモト	(訓なし)
⑭	世尊寺本字鏡抄	院政期前後か	ソテ	ソテ・タモト	ソテ・タモト
⑮	寛元本字鏡集(龍谷大学蔵)	不明	ソテ・タモト	ソテ・タモト	(訓なし)
⑯	寛元本字鏡集(国会図書館蔵)	江戸後期	ソテ・タモト	ソテ	(訓なし)
⑰	白河本字鏡集(東京都立中央図書館蔵)	室町中期か	ソテ・タモト	ソテ・タモト	―――
⑱	応永本字鏡集	1416年	ソテ・タモト	ソテ・タモト	ソテ、ク(タ)モト

※注　書写（成立）年代は、『古語大辞典』（小学館）の「日本の古辞書」（1812～1818頁）によった。

は、訓の幅が広がり、「袖」も、ソテとのみよまれていたのが、ほとんどソテともタモトともよまれるようになっている。「袂」はソテともタモトともよまれうることは鎌倉初期まで変わらないようであるが、音読みのみ記述するものもある。以上を（表3）にまとめる。

4. 字鏡の訓と『今昔』

字鏡には、系統的に類聚名義抄、色葉字類抄及び世尊寺本字鏡の影響がみられるとされる（山田忠雄（一九六七）、（一九八三）「日本の古辞書」『古語大辞典』）。と同時に類聚名義抄及び色葉字類抄に比べ、字鏡は、訓の数が多いことが確かめられている（山田忠雄（一九六七））。

問題となるのは、『今昔』と字鏡の成立年代差である。字鏡集（一二四五年成立）は、字鏡抄をもとにして作られている。字鏡抄は、字鏡集の編者、菅原為長の没年から推して一二四六年のかなり以前（（一九八三）「日本の古辞書」『古語大辞典』）とされる。一方『今昔』は、十二世紀前半の成立とみるのが一般的である。従って成立の年代差は、はっきりしないものの、少なくとも百年ほどはあるだろうか。

さて、巻二三の捨て仮名付きの「袪ト」であるが、各注釈ではこの読みについて、必ずしも明確な根拠が示されているわけではない（2. の用例（1）～（3）後の各注を参照）。しかし、字鏡の「袪」にタモトの訓が一貫して現われていること、それ以外に可能性のある「…ト」訓が見当たらないことは、

「袪ト」をタモトとよみうる積極的な根拠を与えているように思われるのである。

『今昔』の訓が、『今昔』とほぼ同時代成立の類聚名義抄・色葉字類抄での訓からある程度うかがえるとすると、『今昔』執筆当時、一般に「袪」はソデに比べタモトとは読まれにくいという状況にあったと推定される。しかし、古辞書の記述とその当時の人々の〝よみ〟の意識は必ずしも一致せず、現在の辞書のように、多少ずれている可能性がある。古辞書は、典拠に基づいて記述されたり、定着したと認識されたものを載せたりするのが普通であるので、同時代の言語意識をそのまま映すものではない。そうであるなら、古辞書にはなくても、意味的な理由などから他によまれうる訓が人々の意識の中にあったことも推定される。ソデの類義語タモトもその一つだったと仮定すると、『今昔』の筆者は、まだあまり一般的ではないが、読みうる訓としてタモトをここで用いたかった、そして、誤読を避けるために捨て仮名をつけたのではあるまいか。「袪」の字は本朝世俗部にみられるが、『今昔』の筆者は、当時の人々の日常的なモノ（袖）の名称（訓）にあてる漢字を探すのに苦心したかもしれない。あるいは、『今昔』執筆者の冒険的試みであったかもしれないし、すでに一般に広まりつつあった訓であったかもしれない。それを明らかにすることはここではできないが、いずれにせよ、字鏡の側からみれば、「袪ト」をタモトとよませることが何らかの程度無理のないことであったことを字鏡が暗示的に示していると考えることができるのではないだろうか。

『今昔』の「袪ト」の訓は、注釈では「袂」と関連付けているが、「袪」の字それ自体から推測可能であり、古辞書に訓のない時代と、タモトとよみ得た時期（『今昔』成立期）、さらにタモト訓の定着（字鏡の成立時期）がずれているものの、辞書以外における一般的使用意識としては連続的であるように思われる。【補記：安部】

5．まとめ

本稿では、『今昔』にみられる「袪」の訓ソデ・タモトについて、従来からほぼ同時代に成立した名義抄・字類抄のほか、鎌倉初期成立の字鏡について調査を行い、その結果から捨て仮名付きの「袪ト」について、タモトとよむことの妥当性を検討した。

今後の課題は、もし「袪ト」をタモトとあえてよませることを意図したとすれば、なぜソデでなくタモトとよませる必要があったのかという点である。ソデとタモトの意味の違いからタモトの方が訓としてふさわしいと思ったであろうから、この点を明らかにできれば、残る二つ（〔一二〕、〔三三〕）の訓のゆれについても確定ないし推測が可能であると思われる。【補記：安部】

【補記：安部――本文のまとめは栗原がまとめたままとしたが、言及されていない解釈を簡略に補っておきたい。】

①「袪」「袂」のくずし字の近時による「袪」の「タモト」訓獲得の可能性

「袂」は、名義抄・色葉ではタモトの訓があるが、「袪」「袂」のくずし字は近似してくる。この「漢字の近似」も、本来タモトの訓を持たなかった「袪」がタモトと後代に訓じられていく背景として指摘できる。

②（作業の時に、ソデ口からではなく）和服の八つ口側（＝タモト）から手・肘を出す描写（用例二、三例）

冒頭の「袪」の事例（二、三）は、どうも袖先から「手」「肘」を出したのではなく、何かの作業をするために袖が邪魔にならないように、いわゆる「八つ口」から腕を出した描写（袖は帯に挟むなど）とも疑われるところである（特に「肘」の後者）。ここがソデでは、もともと着物を着ている以上、ソデから「手」を出しているのであるから、（二）の例がただ「ソデより手を出して」では描写として不十分であり、また、（三）の例も「ソデより肱を取出して」では、腕まくりと見るには「取出す」は据わりが悪く、やはり「八つ口」（と言って袖の腕の付け根側は広く開いている）側から肘を抜いたからこそ「取り出し」というにふさわしいように思われる。そのように、八つ口側の「タモト」（まさに腕元）から手・肘を抜くような着物の袖の処理の描写であれば、「タモト」の訓がソデよりもふさわしいと思われた。（ただし、そのような描写の絵を探したがまだ見つけ出せていない。）（(14) の巻二八・七話旧大系注参照）

③『宇治拾遺物語』の「衫」の訓カザミは漢字に引かれた誤訓でタモト（ないしソデ）と訓ずべきか。（一章の一例目の類話参照）

本文に用例がある『宇治拾遺物語』諸本の本文の漢字「衫」には、多くカザミの訓が当ててある。類話ではタモトとなっているにも関わらず、意味の異なる衣服を指すカザミと注釈されている。この諸注釈の訓（あるいはカザミとある異本）は、次のような誤解から発生したものと推定され、もとはタモト（かソデ）であったと推定される。漢字「衫」にはカザミの訓もあるが、古くソデの訓があり、中世以降、類義語ということもあってソデ・タモトの訓を共に持つようになる（「衫」の古辞書の訓の推移は本文で省略されているが栗原の調査による）。『宇治』の当該説話箇所は、他の類話から見て、もとはタモトを表す何らかの漢字であったものが、書写過程で中世に同じタモトの訓をもつ「衫」が当てられて伝えられ、そのうち、タモトが曝されているのか着物全体が曝されているのか文意が取れなくなり、「衣ノ袪ト」（今昔）⇓「きぬ・の・衫（タモト）」⇓「（山吹の）絹の衫」（宇治・伝本）⇓「絹のかざみ」（現在の注釈書など）と推移して生じたことが疑われる。注釈で『宇治』のこの「衫」をカザミと訓じることの問題を指摘した。

注

1　日本古典文学大系（岩波書店）＝旧大系、新日本古典文学大系（岩波書店）＝新大系、日本古典文学全集（小学館）＝旧全集、新編日本古典文学全集（小学館）＝新全集、新潮日本古典集成（新潮社）＝集成

2　例えば新しいところであるが、田中牧郎（一九八八：二八三）によれば「本集（『今昔物語集』栗原注記）成立当時の漢字と訓の対応関係の大要は、『類聚名義抄』（観智院本）・『色葉字類抄』（三巻本）によって知ることができる」とある。

3　『宇治拾遺物語』にみられる訓カザミ（衫）については、検討すべき点はあるものの、論旨からはずれるので、これ以上立ち入らないことにする（補記参照）。

参考文献

（注釈書）

山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄（校注）（一九六二・一九六三）『今昔物語集』（日本古典文学大系二十五、二十六）岩波書店

小峯和明・森正人（校注）（一九九四・一九九六）『今昔物語集』（新日本古典文学大系三十六、三十七）岩波書店

馬淵和夫・国東文麿・今野達（校注・訳）（一九七四・一九七六）『今昔物語集』（日本古典文学全集二十三、二十四）小学館

馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一（校注・訳）（二〇〇一・二〇〇二）『今昔物語集』（新編日本古典文学全集三十七、三十八）小学館

阪倉篤義・本田義憲・川端善明（校注）（一九七八～一九八四）『今昔物語集　本朝世俗部』（新潮日本古典集成　第十六、二十九、四十三回）新潮社

渡邊綱也・西尾光一（校注）（一九六〇）『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系二十七）岩波書店

三木紀人・浅見和彦（校注）（一九九〇）『宇治拾遺物語　古本説話集』（新日本古典文学大系四十二）岩波書店

（引用文献）

安部清哉・伊藤真梨子編著（二〇〇八）「『今昔物語集』訓釈語彙考――巻二十六注釈書訓釈異同表を利用した語義比較（ツツヤク・クジル）――」『人文』六、一五五～二一二頁、学習院大学人文科学研究所

田中牧郎（一九八八）「仮名まじり文3『今昔物語集』」佐藤喜代治（編）『古代の漢字とことば』明治書院

中田祝夫・和田利政・北原保雄（編）（一九八三）『古語大辞典』小学館

西崎亨（一九九五）『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社

山田忠雄（一九六七）「字鏡鈔と字鏡抄」山田忠雄（編）『本邦辞書史論叢』三省堂

（古辞書（調査結果掲載順））

《1》

①京都大学文学部国語学国文学研究室（編）（一九六七）『天治本新撰字鏡（増訂版）』臨川書店

《2》

②築島裕（一九六九）『図書寮本類聚名義抄』勉誠社

③吉田金彦（一九七六）『観智院本類聚名義抄』（天理図書館善本叢書三十二～三十四）天理大学出版部
④京都大学文学部国語学国文学研究室（編）（一九五一）『高山寺本類聚名義抄』京都大学文学部国語学国文学研究室
⑤尾崎知光（一九八六）『三寶類聚名義抄』（鎮国守国神社蔵本）勉誠社
《3》
⑥（財）前田育徳会経閣文庫（編）（二〇〇〇）『色葉字類抄　二　二巻本』（尊経閣善本影印集成十九）
⑦（財）前田育徳会経閣文庫（編）（一九九九）『色葉字類抄　一　三巻本』（尊経閣善本影印集成十八）
⑧中田祝夫・峯岸明（編）（一九六四）『色葉字類抄研究並びに索引　本文・索引編』風間書房
⑨東京大学国語研究室（編）（一九八五）『倭名類聚抄京本世俗字類抄二巻本』（東京大学国語研究室資料叢書十三巻）汲古書院
⑩古辞書叢刊刊行会（編）（一九七三）『世俗字類抄』古辞書叢刊刊行会（尊経閣文庫蔵複製）
⑪正宗敦夫（編）（一九七八覆刻（一九三〇））『伊呂波字類抄　二』（覆刻　日本古典全集）現代思想社
《4》
⑫中田祝夫・林義雄（編）（一九八二）『字鏡鈔　天文本　影印編』勉誠社
⑬古辞書叢刊刊行会（一九七四）『字鏡抄』古辞書叢刊刊行会（尊経閣文庫蔵）
⑭築島裕（主編）（一九八〇）『字鏡（世尊寺本）』（古辞書音義集成第六巻）汲古書院
⑮龍谷大学仏教文化研究所（編）（一九八八）『字鏡集（上・下）』思文閣出版
⑯中田祝夫・林義雄（一九七七）『字鏡集　寛元本　影印篇（第二冊）』勉誠社
⑰中田祝夫・林義雄（一九七七）『字鏡集　白河本　影印篇（第一冊）』勉誠社
⑱（財）前田育徳会経閣文庫（編）（二〇〇一）『字鏡集四　二十巻本・巻十六～巻二十』（尊経閣善本影印集成二十四）

【付記】本稿は、①次の研究成果の一部でもある。科学研究費二〇〇八・二〇〇九年度萌芽的研究「古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究（代表・石井久雄）。②次の授業において安部の指導のもとに行われた発表によるもので、古辞書の確認は安部と行った。学習院大学大学院二〇〇七年度「日本語学演習」（安部清哉）

（くりはら・さよこ　博士後期課程）
（あべ・せいや　教授）